

チャンキヤ『宗義書』「毘婆沙師」章 教説個所の訳注研究(2)

木 村 誠 司

I

本稿で扱うのは、二諦(dvi-satya, bden gnyis)に関する個所である。以前、アビダルマ(abhidharma)の二諦説について、何度か言及したことがあった¹⁾。当初の計画では、インド・チベットを横断するつもりであったが²⁾、遺憾ながら、頓挫したままで、計画自体、気の抜けたビールみたいになってしまった。

チベットに関しては、チャンキヤ(ICang skya, 1717-86)の『宗義書』(grub mtha')を最初に取り上げる予定にしていた。簡にして要という印象だったからである。最初の思惑とは異なる形となったけれど、ここに、チャンキヤの所論を訳注することにした³⁾。訳語は、出来るだけ、現代語訳を心掛けた⁴⁾。

さて、アビダルマの二諦説とは、部分と全体の問題であろう。その代表的見解としては、差し詰め、世親(Vasubandhu)の『俱舎論』Abhidharmakośabhāṣya 第 6 章「賢聖品」mārgapudgalanirdeśa 第 4 偈が挙げられる⁵⁾。そこには、徹底した分析至上主義が披瀝されている。すなわち、分析可能なものは存在性を剝奪されるのである。チャンキヤも『俱舎論』を受けて論を進めている。ただ、『俱舎論』にしても、チャンキヤの『宗義書』にしても、分析至上主義への懷疑みたいなものが見えるような気がして、彼等の真意はまだつかみ切れないのである。

ともあれ、以下に、拙訳と注を提示して、最後に原文ローマ字転写を付し、識者のご指摘を待つ所存である。

注

- 1) 拙稿 1. 「アビダルマの二諦説—序章—」『駒澤大学仏教学部論集』第 42 号、平成 23 年、pp.350-326、拙稿 2. 「アビダルマの二諦説—訳注研究・インド編 I—」『駒澤大学仏教学

(44) チャンキヤ『宗義書』「毘婆沙師」章教説個所の訳注研究(2)(木村)

部論集』第43号、平成24年、pp.468-434。

- 2) I-注1)の第1拙稿に計画を示している。以降、特に注目すべき論文に、松田和信「スティラマティ疏から見た俱舎論の二諦説」『印度学仏教学研究』63-1、平成26年、pp.387-379がある。松田論文は、筆者が最も困難としていたスティラマティ(Sthiramati, 安慧)の『俱舎論』注を扱っている。その際、新出の梵本を利用し、詳しい訳注を付した。
- 3) 底本として *Buddhist Philosophical Systems* ed. by L. Chandra, New Delhi, 1977 (Śāta-Piṭaka Series, vol.233) を使用した。なお、チャンキヤ『宗義書』の詳しいタイトルについては、拙稿「チャンキヤ『宗義書』「毘婆沙師」章教説個所の訳注研究(1)」『駒沢大学仏教学部研究紀要』第79号、令和3年、p.160 参照。また「毘婆沙師」章を俯瞰するには、池田練太郎「ICaṅ skya 宗義書における Vaibhāṣika 章について」『日本西藏学会々報』25、昭和54年、pp.1-4 が有益である。チベットにおけるアビダルマの二諦説を扱った研究書には以下のものがある。小谷信千代『チベット俱舎学の研究』平成7年(第4 偈注は p.71)は、チムジャムピーヤン(mChims 'jam pa'i dbyangs, 1210-1289) 作『俱舎論頌注 アビダルマ莊嚴』*Chos mngon mdzod kyi tshig le'ur byas pa'i 'grel pa mNgon pa'i rgyan* の第6 章訳注である。また、現銀谷史明、ガワン・ウースン・ゴンタ『全訳 ダライ・ラマ1世 俱舎論註『解脱道解明』』平成29年(第4 偈注は pp.462-463)は、ゲドゥンドゥブ・ダライラマ1世(dGe 'dun grub, 1391-1474) 作『俱舎論解説 解脱道明説』*Chos mngon pa'i mdzod kyi rnam par bshad pa Thar lam gsal byed* の全訳である。他に、現銀谷史明「毘婆沙部 (bye brag smra ba) における存在の分類」『日本西藏学会々報』47, 2002, 特に、pp.9-13 は二諦説を多方面から論じ益するところ大である。また、吉水千鶴子「ゲルク派による経量部学説理解(1) 二諦説」『成田山仏教研究所紀要』21, 1998, pp.51-75 も重要である。両論文とも、経量部 (Sautrāntika, mDo sde pa) との比較を行う。毘婆沙師の二諦説理解には、この比較は必須である。そのことにも深く関わる重要な記述に触れておきたい。もう何度も、引用した記述だが、あえて紹介する。お許し願いたい。ツォンカパ (Tsong kha pa, 1357-1419) の講義録、『量の大備忘録』*Tshad ma'i brjed byang chen mo* からのものである。

〔ダルマキールティ (Dharmakīrti) 作『量評釈』*Pramāṇavārtika* の二諦と〕〔世親作〕『俱舎論』(*mDzod, Abhidarmakośa*) で説かれた二諦と設定法は一致しない、つまり、そこ [= 『俱舎論』「賢聖品」第4 偈] では、壺等は破壊によって、その〔壺の〕認識は廃棄可能である〔そういったものを〕世俗諦と位置付ける。一方、ここ [= 『量評釈』「知覚」*pratyakṣa* 章第3 偈] では、〔目的達成能力のある (arthakriyāsamārtha, don byed nus pa)〕自相によって成立しているものを勝義として成立していると位置付ける。故に、そこ [= 『俱舎論』] では〔全体たる壺が、部分に破壊可能であるという観点から、その壺は〕

世俗の実例であると説明されるけれど、ここ [= 『量評釈』] では、〔目的達成能力を持つという観点から、同じ、全体たる「壺」を、〕勝義の実例であると位置付けるのである。

mdzod nas bshad pa'i bden gnyis dang 'jog tshul mi gcig ste/de nas bum pa la sogs pa bcoms pas de'i blo 'dor du rung ba la kun rdzob tu bzhag la/'dir rang mtshan nyid kyis grub pa la don dam par grub par bzhag pas der kun rdzob kyi mtshan gzhir bshad kyang/'dir don dam pa'i mtshan gzhir bzhag pa yin no// (The collected works of rJe Tson-kha-pa Blo-bzan-grags-pa, vol.22, Pha, 34/2-3, folio.218)

ここには、部分と全体に関する問題点が指摘されている。

- 4) I-注1)の第2拙稿で、『俱舎論』の偈と自注を訳し、梵・藏・漢の校訂テキストを付した。本稿も、当時の訳を参考している。しかしながら、本稿は、チャンキヤの意図を反映しなければならない。その点を考慮すると正しい選択とはいえないのだろう。チャンキヤは、基本的に中観帰謬派(dBu ma thal gyur pa, Prāsaṅgika-Mādhyamaka)の立場にあり、毘婆沙師は批判対象である。その点については、I-注3)の拙稿で論じた。この二諦説に関しても、単なる祖述と捉えるのは危険であろう。とはいえ、筆者には、その思想的機微が未だ見抜けない。なお、定評のある『俱舎論』訳には、櫻部建・小谷信千代『俱舎論の原典解明 賢聖品』1999, pp.61-62がある。
- 5) 同偈を、どの部派の思想に所属させるのかについては、諸説あった。筆者の解釈はこうである。「世親は、分析至上主義の限界を示唆し、唯識(Vijnāpti-mātratā)への移行を模索した」。そのような仮説に基づき訳してみた(I-注1)の第2拙稿)。I-注2)の松田論文では「スティラマティ疏を見る限り、『俱舎論』『賢聖品』第4偈の二諦説は、フラウヴェルナーに始まる多数の研究者がするような経量部に傾斜した二諦説ではなく、説一切有部の二諦説として何ら不都合な点はないということになると思われる」(p.381)と述べられている。

II(訳)

これ〔毘婆沙師〕の流儀(lugs)の二諦の設定法に関する規範(ngo bo, rūpa)¹⁾とは、『俱舎論』(mDzod, Abhidharmakośa)において、

あるものを〈物理的に〉破壊した時、その認識がなくなるもの、そして、知性によって、〈成分を〉分析した(gzhen bsal, anyāpoḥa)²⁾時、〔その認識がなくなるもの〕、それは、壺や水のようなものであり、〈分割可能な〉日常的存在(kun rdzob yod, samvṛti-sat, 世俗有)である。そうでないとすれば、〈分

割不可な〉究極的存在(*don dam yod, paramārthasat*、勝義有)³⁾である⁴⁾。

といわれる如くである。ある存在(*chos, dharma*)を破壊(*btsom*)・考察(*gzhi*)何れかによって〔壊した時〕、〔その存在〕自身であるという認識が廃棄可能となる存在は、日常的真理(世俗諦)である。そして、それ〔ある存在〕を〔破壊・考察〕何れかによって〔壊した時〕、〔その存在〕自身であるという認識が廃棄不可能となる存在は、究極的真理(勝義諦)である。そのうち、「破壊」とは、ハンマー等によって、壊すこと(*bcom pa*)である。そして、「考察」とは、色(*kha dog*)・香(*dri*)・味(*ro*)等他の要素(*chos, dharma*)⁵⁾を、知性によって、個々に分析することである。日常的真理の実例(*mtshan gzhi*)⁶⁾は、壺や壺の中の水のようなものである。日常的真理といわれる理由は、破壊・考察によって、自分自身の認識を捨てることが可能な(*'dor du rung ba*)壺等のそれらを、日常、壺等と命名しているので、日常の観点で(*dbang gis, vaśāt*)壺等云々であると言う場合、まさしく真理を語っているのであり、偽りではないから、日常的真理であると『俱舎論』の自注(*rang 'grel*)⁷⁾で説明されているのである。

一方、さらに、汚れあるもの(*nyong mongs can, kliṣṭa*、有染汚)と汚れなきもの(*nyong mongs can ma yin pa, akliṣṭa*、無染汚)の言説〔言語化された〕知(*tha snyad pa'i shes pa, samvyavahārika-jñāna*)によって、真理と把握されるので、そのように述べられる。即ち、『俱舎論注 王子』(*mDzod 'grel rgyal sras ma*)〔=ヤショーミトラ(*Yaśomitra*)作『明瞭義』*Sphuṭārthā*]⁸⁾において、「日常的真理である。その汚れあるものと汚れなきものの世俗たる言説〔言語化された〕知によって、把握されるので、日常的真理なのである」⁹⁾と説かれているのである。

究極的真理の実例は、諸々の色形や感受や想念や心や心作用といった独立したもの(*rang skya ba*)である。究極的真理といわれる理由は、あるものを、破壊等によって、分析しても、自分自身の認識を捨てられない色形等それらは、確実に、究極的存在なので、究極的真理という『俱舎論』の自注¹⁰⁾で説かれているのである。さらに、究極的(勝)とは、出世間の智慧であり、その目的(*don, artha*)として存在する対象(*yul, viśaya*)なので、究極的真理なのである。プールナヴァルダナ(*Gang spel, Pūrṇavardhana*)〔注『随相論』*Lakṣaṇānusāriṇī*〕において、「究極的(勝)とは、出世間の智慧であり、その目的として存在する対象が究極的なのである。」¹¹⁾と説かれている。

しかしながら、これら〔二諦〕について、尚(*da dung*)正確さ(*zhib cha*)が必要である。〔全体を構成する部分たる〕素材(*rdzas, dravya*)・〔その素材の集合体

である] 暫定的なもの(btags, prajñapti)の区別は、勝義として成立しているものを「素材有」、世俗として成立しているものを「暫定有」とするのである。¹²⁾

注

- 1) ngo bo は通常、「本質」などと訳すが、ここでは、「規範」と訳してみた。「典型」という訳語も想定した。
- 2) gzhen bsal, anyāpoha という言葉については、拙稿「アポーハ異聞」『駒澤大学仏教学部研究紀要』第70号、平成24年、pp.148-139参照。筆者は、ディグナーガ(Dignāga)の有名なアポーハ説の由来を『俱舎論』のこの偈に求めるという仮説を立てた。ディグナーガ自身、世親に多大な影響を受け、『俱舎論』注も書いていることからすれば、満更、ただの珍説とは言えないのではと考えている。
- 3) ここでは、二諦すなわち二真理が論じられている。ただ、真理は存在に裏付けられたものである。サンスクリット語からは、この考え方が理解しやすい。真理は satya であり、存在は sat なのだから。その点については、I-注1)の第2拙稿 pp.450-449 の注2)参照。チャンキヤの以下の説明でも、当たり前のように、存在ではなく真理(諦)が語られている。I-注3)の小谷本 p.300 の注53には、真理と存在の問題が論じられ、チムジャムピーヤンの論述スタイルにも言及している。
- 4) 北京版、『俱舎論偈』、No.5590, Gu,20a/1-2に相当する。原文カッコ内(gang la bcom rang blo yi gzhan/bsal na de blo mi 'jug pa/bum chu bzhin du kun rdzob tu//yod de don dam yod gzhan no//)、北京版、『俱舎論偈・注』No.5591, Ngu,8b/7-8にも相当する。原文カッコ内 (gang la bcom dang blo yis gzhan/bsal na de blo mi 'jug pa/bum chu bzhin du kun rdzob tu//yod de don dam yod gzhan no//)北京版には、偈だけの訳と注を含む訳の2種がある。太字の部分が両者の違いである。チャンキヤは、gang la bcom dang blo yis gzhan/bsal na de blo mi 'jug pa/bum chu bzhin du kun rdzob tu//yod de don dam yod gzhan no//とし、『俱舎論偈・注』と一致する。もっとも rang と dang は、チベット語表記の酷似のせいかもしれないが、わざわざ、『俱舎論』の偈と注を分けて、上に引用を示したのは、以下のような指摘があったからである。

チベット大蔵経においても、『俱舎論』の本頌が、そのヴァスバンドゥ〔世親〕による註釈と別本として録されているが、『俱舎論』(mNon mdzod, mDzod)といえ、八品までの本頌部分のみを指し、ヴァスバンドゥによる註釈部分は、第九品をも含め『自註』(mDzod ran 'grel)と呼ばれ、決して『俱舎論』と呼ばれることはない。このようなチベットにおける、『俱舎論』という呼称の用法は、たんに呼称の問題として処理

(48) チャンキヤ『宗義書』「毘婆沙師」章教説個所の訳注研究(2)(木村)

されるべきものではなく、本頌部分と註釈部分における、ヴァスバンドゥの論述に学説上の相違を認めるという意識に拠るものなのである。(白館戒雲(ツルティム・ケサン)「アビダルマ研究に関わるチベット文献からの二、三の情報」『加藤純章博士選暦記念論集 アビダルマ仏教とインド思想』2000, p.72、〔 〕内筆者の補足)。

- 5) chos(dharma)は、先に「存在」と訳し、ここでは『俱舍論』二諦説中の用法を踏まえ、「要素」とした。恐らく、chos(dharma)には、二重の意味がある。「要素」(=素材)と、それが集合した集合体としての「存在」である。前者は、svabhāva(rang bzhin)、後者は bhāva(dngos po)に置き換え可能なのではないかと考えているが、これに確たる根拠があるわけではなく、筆者の思い付きである。
- 6) mtshan nyid, mtshon bya, mtshan gzhi は、チベット撰述文献において、頻繁に登場する3項から成る術語である。論理学(因明)の分野に関わるものであるが、未だにその実態は明らかではない。そのため、日本語訳を躊躇する傾向にある。そのような傾向を生んだ要因は、この術語に詳しい福田洋一氏が、次のように発言したことが大きい。

mtshan gzhi が mtshon bya として「定義される」、と訳すのは、明らかにミスリーディングである。mtshan nyid を「定義」と訳すのは、mtshan nyid が mtshon bya を「定義する」と理解しているからであろう。インド文献における lakṣya, lakṣaṇa 関係の訳語としてはそれも妥当であろうが、チベット固有の三つ組みの概念の訳語としては適切とは言いがたい。mtshon par bya の代わりに、同じような意味で rnam par gzhag という動詞句が用いられることもあるので、その意を汲み、本稿では「規定される」と訳している。(福田洋一「初期チベット論理学における mtshan mtshon gzhi gsum をめぐる議論について」『日本西藏学会々報』49, 2003, p.16)

福田氏は、こうして、「定義」という訳語を否定し、3項の術語を和訳することを躊躇するのである。しかし、福田氏も論文の冒頭で述べているように、実際の用例においては、3項の術語は、論点を明確にするために使用される。その点を考慮すれば、混乱をもたらすような複雑怪奇な術語ではないはずである。事実シャーキヤチョクデン(Śākya mchog ldan, 1428-1507)の『俱舍論』注の記述を参考にすれば、mtshan nyid「定義」、mtshon bya「[定義されるものの]通称」、mtshan gzhi「定義の実例」と捉えて大過ないように思われた。彼は、こう述べているのである。

『俱舍論』「賢聖品」第4偈の)ここに、定義と〔二諦それぞれの〕通称(mtshon bya)の語釈(sgra bshad pa)〔そして〕実例の規定が整理されているのである。

'di la/mtshan nyid dang/mtshon bya'i sgra bshad pa/mtshan gzhi'i rnam gzhag gtan la phab pa'o/(シャーキヤチョクデン作『俱舍論難解箇所を解説する論 毘婆沙大海』Chos

mngon pa'i mdzod kyi dka' ba'i gnas rnam par bshad pa'i bstan bcos Bye brag tu bshad pa'i mtsho chen po, The complete Works (gsum 'bum) of gser-mdog pan-chen sakya-mchog-ldan, Delhi, 1995, vol.21, TBRC の電子テキスト、folio.106/7)

先にも述べたように、この3項の術語の由来は、謎に包まれて、真相は、十分にわかってはいない。そこで、このチベットで発展した3項の術語の歴史をかいつまんで、述べておこう。通常のケースでは、*mtshon bya*, *mtshan gzhi* は、共に、梵語 *lakṣya* の訳語である。*lakṣaṇa* と *lakṣya* の2項で済めば、問題はない。しかし、チベットでは、3項で論ずる。この点については、梵語に堪能な翻訳官から、次のような異議が提示されていた。

〔梵語の〕*lakṣya* という全く同じ言葉を、翻訳官は、ある時は、*mtshan gzhi*, ある時は、*mtshon bya* と訳すので、この2つは同じものであり、昨今、*mtshan mtshon gzhi* 3つを組み合わせるの、偉大なる教説の用例ではない。ないとすれば、*shes bya*, *shes byed*, *shes gzhi* の3つ *brjod bya*, *brjod byed*, *brjod gzhi* の3つ等も必要となってしまうからである。

la ksana (read.lakṣya) ces pa'i sgra gcig nyid lo tsa bas res mtshan gzhi dang/res mtshon bya la bsgyur ba yin pas 'di gnyis don gcig la/deng sang mtshan mtshon gzhi gsum gyi sbyor ba byed pa ni gzhung lugs chen po'i brda chad ma yin te/gzhan du na shes bya shes byed shes gzhi gsum/brjod bya brjod byed brjod gzhi gsum la sogs pa yang dgos par thal pa'i phyir ro//

これは、コランパ (Go ram pa '1429-1489) 作『7部と経の真意を不顛倒に注釈する量正理藏義明』*sDe bdun mdo dan bcas pa'i dgongs pa phyin ci ma log par 'grel pa Tshad ma rigs pa'i gter gyi don gsal bar byed pa*, p.313-1, ll.4-5 で紹介されている。この翻訳官は、パン翻訳官 dPang Lo という人物らしい。(Leonard W.J. van der Kuijp, *Contributions to Development of Tibetan Buddhist Epistemology*, Wiesbaden, 1978, p.297, n.247 参照)

論理学の問題とされる3項の組み合わせは、実は、論理学文献に由来するものではない。その辺の事情が、事の複雑さを示している。3項の術語は、どうやら、『大乘莊嚴經論』*Mahayānasūtrālamkāra* 「求法品」Dharma-paryeṣṭy-adhikāra 第36偈に端を発するらしい。当の偈は、以下のようなものである。

諸仏は有情を利益するために、*lakṣya (mtshan gzhi)* と *lakṣaṇa (mtshan nyid)* と *lakṣaṇā (mtshon pa)* を区別して説明した。

lakṣyaṃ ca lakṣaṇaṃ caiva lakṣaṇā ca prabhedataḥ/

anugrahārthaṃ sattvānāṃ sambuddhaiḥ samprakāṣitah//

sangs rgyas rnam kyis sems can la//phan gdags phiyir na mtshan gzhi dang//

mtshan nyid dang ni mtshon pa dag//rab tu dbye bas yang dag bshad//

(50) チャンキヤ『宗義書』『毘婆沙師』章教説個所の訳注研究(2)(木村)

他に、『現観莊嚴論』*Abhisamayālamkāra*が、その由来とされている。3項は、論理学の範疇を超えて、採用された特殊な理論と了解すべきものである。それを導入したのは、有名なチャパ(Phya pa, 1109-1169)とされる。(Leonard W.J. van der Kuijp, *ibid.* p.60, pp.77-80 参照) 詳細は、拙稿「チベット仏教における定義」『駒澤短期大学仏教論集』4,1998, pp.272-245、「lakṣaṇa (mtshan nyid), lakṣya (mtshan gshi), lakṣaṇā (mtshon pa) について—『大乘莊嚴經論』「求法品」第36—43頌に対するチベット撰述注の試訳—」『インド論理学研究』1平成22年、pp.243—273、福田洋一「mtshan mtshon gzhi gsum の実例の解説」『インド論理学研究』3, 2011, pp.133-148 参照。3項の先駆的研究は、小野田俊蔵「mtshan ñid と mtshon bya について」『印度学仏教学研究』33-1,1984, pp.324-321 であろう。

- 7) 北京版、No.5591, Ngu, 9a/2 を指している。以下のようなものである。

de dag kho na la kun rdzob tu de'i ming du btagas pa yin pas kun rdzob kyi dbang gis bum dang chu yod do//zhes brjod pa na bden pa kho nar smras pa yin gyi/ brdzun pa ni ma yin pas de ni kun rdzob kyi bden pa yin no//

チャンキヤの引用とは1部相違がある。太字で示した部分が、異なる部分である。チャンキヤの引用は、『俱舍論』自注とは、微妙に異なるが、趣旨は同じであると思われる。ここでは、勿論、チャンキヤの文章に従って訳した。

- 8) ヤシヨミトラの『俱舍論』注『明瞭義』をこのように呼ぶことは、ジャムヤンシェーパ(Jam dbyangs bzhad pa, 1648-1722) の作品でも同じである。それについては、拙稿「ジャムヤンシェーパ作『学説綱要書』「毘婆沙師」章についての報告」『駒澤大学仏教学部論集』第41号、平成22年、p.331の訳文参照。
- 9) 『明瞭義』チベット語訳、北京版、No.5593, Chu, 185a/7-8 に相当する。カッコ内が原文。(kun rdzob kyi bden pa yin te/kun rdzob kyi tha snyad dam shes pa nyon mongs can pa dang/nyon mongs pa can ma yin pas 'dzin pas na kun rdzob kyi bden pa'o//)。チャンキヤの引用とは1部相違がある。太字で示した部分は、引用とは異なった部分である。特に問題となると思われるのは、『明瞭義』の dam (あるいは) をチャンキヤは de (それ) としている箇所である。梵本 U.Wogihara ed. *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā: The Work of Yaśomitra*, p.524, ll.27-28 (samvṛtā samvyavahāreṇa jñānena vā kliṣṭenākliṣṭena vā grhyata iti samvṛti-satyam.) によれば、おそらく dam が相応しいのであろう。しかし、「言語化された知」と「有染汚と無染汚の知」を同一視する点で、両者の理解は一致する、と思われる。
- 10) 北京版、No.5519, Ngu, 9a/3-5 に相当する。カッコ内が原文。(gang la bcom yang de'i blo 'jug pa kho na yin la/blos chos gzhan bsal yang de'i blo 'jug pa de don dam par yod pa yin te/dper na gzugs lta bu'o//de la ni dul phra rab tu bcom yang rung/blos rol sogs pa'i chos bsal kyang rung

gzugs kyi rang bzhin gyi blo 'jug pa nyid te/tshor ba la sogs pa yang de bzhin du blta bar bya'o//de ni don dam par yod pa'i phyir don dam pa'i bden pa zhes bya'o//

チャンキヤはこれを簡略化して述べていると思われる。しかし、「色形の自性」(gzugs kyi rang bzhin)というキーワードともいえる部分を省いていることは気になる。現銀谷史明「二諦と自性—チベットにおける『俱舍論』解釈の一断面—」『東洋学研究』39, 2002年, p.145では「勝義有であるかどうかの基準は、世親、ヤンヨーミトラの両者とも分析していった場合に最後に自性(rang bzhin)、本性(ngo bo nyid)が残り、それに対する意識が働くという点にある。」と述べられている。

- 11) 『随相論』北京判、No.5594, Nyu,192b/7(dam pa zhes bya ba ni 'jig rten 'das pa'i ye shes te de'i don du yul ni don dam pa'o//)。チャンキヤの引用には de'i don du **yod pa'i** yul 「その目的として**存在する**対象」という太字の部分加わっている。
- 12) 「しかしながら」以下の文意がはつきり掴めないまま訳した。考察の1部は、拙稿「dravyasat・prajñaptisat 覚え書き」『インド論理学研究』III 平成23年11月、pp.105-126で示したが、未だに明確なことはわからない。

ローマ字転写

'di'i lugs kyi bden gnyis 'jog tshul la ngo bo ni/mdzod las/

gang la bcom dang blo yis gzhan//bsal na de blo mi 'jug pa//

bum chu bzhin du kun rdzob tu//yod de don dam yod gzhan no//

zhes pa ltar/chos gang la bcom gzhi gang rung gis rang yin gyi blo 'dor du rung ba'i chos ni kun rdzob bden pa dang/de gang rung gis rang yin gyi blo 'dor du mi rung ba'i chos ni don dam bden pa'o//de la bcom pa ni tho ba la sogs pas bcom pa dang/gzhi pa ni kha dog dri ro sogs chos gzhan blos so sor bsal pa'o//kun rdzob bden pa'i mtshan gzhi ni bum pa dang/bum pa'i nang gi chu lta bu'o// kun rdzob bden pa zhes brjod pa'i rgyu mtshan ni/bcom gzhi gis rang gi blo 'dor du rung ba'i bum la sogs pa de dag la kun rdzob tu bum la sogs pa'i ming gis btags pa yin pas kun rdzob kyi dbang gyis bum pa la sogs pa de dang de'o zhes brjod pa na bden pa kho nar smras pa yin gyi rdzun pa ni ma yin pas kun rdzob kyi bden pa zhes brjod par mdzod rang 'grel las bshad la/yang na tha snyad kyi shes pa nyong mongs can dang/nyong mongs can ma yin pas bden par 'dzin pas de ltar brjod pa ste/mdzod 'grel rgyal sras ma las/kun rdzob kyi bden pa yin te/kun rdzob kyi tha snyad de shes pa nyon mongs can dang nyon mongs can ma yin pas 'dzin pas na kun rdzob kyi bden pa 'o//zes gsungs so// don dam pa'i mtshan gzhi ni/gzugs dang tshor ba

(52) チャンキヤ『宗義書』「毘婆沙師」章教説個所の訳注研究(2)(木村)

dang 'du shes dang sems sems byung rang kya ba nmams yin no//don dam bden pa
zhes brjod pa'i rgyu mtshan ni/gang la bcom pa la sogs pas bsal yang rang gi blo 'dor
du mi rung ba'i gzugs la sogs pa de dag ni nges par don dam par yod pa'i phyir/don
dam pa zhes brjod par rang 'grel las gsungs pa dang/yang na/dam pa ni 'jig rten las 'das
pa'i ye shes yin la de'i don du yod pa'i yul yin pas don dam pa'i bden pa ste/gang
spel las/dam pa zhes bya ba ni 'jig rten las 'das pa'i ye shes te/de'i don du yod pa'i yul
ni don dam pa'o//zhes gsung so//'ong kyang 'di dag la da dung zhib cha dgos so//rdzas
btags kyi khyad par ni/don dam du grub pa la rdzas yod dang/kun rdzob tu grub pa la
btags yod du byas so//(63a/4-64a/4)

令和3年暮れ、脱稿

〈キーワード〉 チャンキヤ、アビダルマの二諦説、宗義書